

St. Luke's International University Repository

Nursing Education of Terminal Care in Adult Nursing.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小島, 操子, 岩井, 郁子, 田村, 正枝, 小松, 浩子, 荒川, 靖子, 大森, 里子, 伊奈, 侑子, 菊地, 登喜子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/166

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



成人看護学における臨死患者の看護教育

小島操子, 岩井郁子, 田村正枝,
小松浩子, 荒川靖子, 大森里子,
伊奈侑子, 菊地登喜子

はじめに

近年, 医学の進歩や文明の発展に伴い, 社会の要請および教育上のニーズから, 死の教育, 死の臨床, 死の看護教育などが強調されるようになった。当大学成人看護学では, 臨死患者の看護を一貫してとりあげてきており, カリキュラムの改正でそれをさらに明確にうち出した。¹⁾

成人看護学では, 成人看護学における臨死患者の看護の位置づけ, 実施方法などの改正にむけて, 実習を通して経過を評価してきたのでこれらの結果を報告し, 今後の教育に役立てたい。

I. 成人看護学における臨死患者の看護の位置づけ

成人看護学では, 昭和50年度より臨死患者の看護を『成人看護学概論』の「成人期にある人の健康問題の特徴に応じた看護婦の役割・機能」の中に, “近い将来死をまぬがれ得ない患者の看護”として位置づけてきた。昭和52年度の聖路加看護大学カリキュラム改正によって, 成人看護学は3年次から2年次に行われることになり, 理論学習は前期に, 実習は後期に行うようになった。

しかし, 年々多くなっている複雑な問題状況にある成人期の患者の総合看護をめざした実習目標の達成は2年次では困難であった。そこで, 昭和55年度から, 成人看護学実習4単位のうち1単位は学生の成熟度を考慮して小児, 母性および精神看護学の実習を終了した3年次に行うこととし, 臨死患者の看護の実習も含めた下記の問題状況にある患者の看護実習の中から選択させて実施していた。

- (1)近い将来死をまぬがれ得ない状況にあるがん患者
- (2)急性状況にある患者
- (3)身体の一部または機能を失なわれなければならない状況にある患者
- (4)危険因子を多く持ちながら手術を受ける患者
- (5)生活の場で疾病の自己管理が困難なために入退院をくり返す慢性疾患患者

(6)生活の援助を全面的に必要とする老人患者

昭和59年度に成人看護学カリキュラムの改正にあたって, 死にゆく dying ということは, 成人のストレス・危機状態をもたらす主要なストレス因子になると考え, 臨死患者の看護は, 『成人のストレス・危機状態と看護』の中に「死にゆく患者の看護」として位置づけた。成人看護学のカリキュラム改正に先だって, 昭和58年度後期の実習から, 3年次の実習は臨死患者の看護にしぼって行うことにした。そして, 慢性疾患患者と手術患者の看護実習3単位は2年次にレベルI実習として, 臨死患者の看護実習1単位は3年次にレベルII実習として位置づけた。

II. 臨死患者の看護実習

(1) 実習目標

臨死患者の看護の実習目標は, 「近い将来死をまぬがれ得ない患者の生命を意義深く生きられるように, また尊厳をもって死を迎えられるように援助することができる」である。そして, 具体的達成目標として, 患者の苦痛の緩和, 日常生活の援助, 患者・家族の心理面への働きかけ, 家族のニーズの充足, チームアプローチなどに関する認知領域および精神運動領域の目標が各9項目と情意領域の目標が4項目ある。

これらの具体的達成目標は, 改正カリキュラムで理論学習をうけた昭和59年度2年生が実習を行う昭和60年度には, 教育内容にそって改正された。しかし, この改正は, 実習目標設定の時点でカリキュラム改正が前提にあった上に, 臨死患者の看護の原理原則は変わらないので, 部分的修正にとどまった。

(2) 実習方法

①実習期間および単位: 実習期間は3週間で45時間1単位である。最初の1週間は文献学習とし, 後の2週間に8回の実習を行っている。

②受けもち患者の選択と決定: 近い将来死をまぬがれ得ない患者とは, 診断名にかかわらず, 治癒をめざ

した治療に限界があり、退院も不可能で病院で死を迎えざるを得ない状況にある患者であることが望ましいが、社会復帰をめざして治療中の患者もやむなく受けもっている。

受け持ちの患者の決定については、実習開始数日前に指導教師が数名の患者を選択し、病棟の主任看護婦の了解を得た後、学生に患者の概略を紹介する。その後、学生は実際に患者に会い、紹介された患者の中から自分の意思で受けもち患者を決定する。

学生は実習開始日までには受けもち患者の診療記録を読み、患者の病状や治療、現在何が問題となっているかなどを把握して実習に臨む。

③指導体制：学生は大きく4グループにわけられ、各グループはさらに5グループにわけられる。1人の教師は1～3名の学生を受けもつが、この間に成人看護学レベルⅠの看護実習を行っている2年生が、1教師のもとに5～7名いる。

④文献学習：実習目標を達成するために実習開始1週目は自己学習として、文献学習を行う。指示される必読文献は、臨死患者のケア、危機、家族のニーズに関するものである。

⑤カンファレンス：カンファレンスは病棟単位の小グループで指導担当教師と行うものと、小グループが一堂に会して大グループで行なうものがある。主として小グループのカンファレンスでは受けもち患者の看護問題や看護のあり方などをお互いに話し合う。大グループでは、情報交換を行ったり、小グループごとに臨死患者の看護に関連して抱えている問題をもち寄って大グループ全体で討議する。

III. 臨死患者の看護実習に関する評価

昭和58年度より、成人看護学の理念、方針にそって臨床実習の1単位を臨死患者の看護にしぼって、3年次に行うことにしたので、その実習の意義、目的・目標、実習方法などを検討し、カリキュラム改正や指導方法の改善に役立てることを目的として質問紙調査により評価を行った。

1)対象：臨死患者の看護実習を行った昭和58年度3年生52名、昭和59年度3年生54名の計106名を対象とした。

2)方法：質問紙による調査

①調査方法：各年度とも、全実習グループの実習終了後に、質問紙を配布し、記名回答の上、回収した。

②調査内容：当概実習に対する学生の考え、意見および効果を明らかにし、今後の実習や実習指導のあり方を検討するために、以下のような6大設問を

設定し、各設問に数項目の質問項目を作成した。

- (1)実習の必要性・意義と実施期間の妥当性
- (2)実習目標の達成可能性と達成期間の適切性
- (3)文献学習の適切性
- (4)カンファレンスの有用性
- (5)実習中の「落ち込み」、「支え、励み」の内容
- (6)実習における自己発見・自己成長の内容

③回答方法：回答方法は5段階評定による選択式に選択理由を書かせたものと、自由記述形式によるものにした。

3)調査内容の分析

設問項目毎に5段階評定の度数分布を算出し、選択理由および自由記述の内容はそれぞれ類似内容毎に分類し、各々を代表する名称を付して、それらを集計した。

IV. 評価結果

質問紙の回収状況は、昭和58年度3年生47部、昭和59年度3年生48部で総数95部（90%）であった。各設問項目の有効回答率は94～100%であった。

(1) 実習の必要性・意義と実施時期の妥当性

実習の必要性・意義については、図1に示すように、「認める」と答えたものが80名（85%）「やや認める」が8名（9%）で両者を合わせると94%に達した。次いで、「わからない」が6名（6%）で、「認めない」と答えたものはいなかった。「認める」及び「やや認める」とした理由は、「看護において避けることのできない問題であるから、学生時代に実際にケアすることは必要である」が最も多く、その他「死生観や看護観を培うことができる」、「自分をみつめる機会となり自己成長につながる」等であった。

当概実習の実習目標を達成するための実施時期として、「3年次がよい」と回答した学生は75名（79%）で、「3年次、2年次どちらともいえない」としたものは17名（18%）で、「2年次がよい」としたものは3名（3%）のみであった（図2）。それらの理由についてみると、「3年次がよい」とした理由は、大きく2つに分けられ、1つには、「2年次の成人看護学実習を終了し、3年次の他領域の実習を行ったことで視野が広がり深く物事を考えられる」であり、もう一つには「2年次よりも看護過程の展開、看護技術の上達があることや病棟への慣れができてきたことから余裕をもってケアに臨める。」ことであった。一方、「2年次がよい」と答えた理由としては、「2年次の講義の直後に行った方が学習したことが生かせる」が挙げられた。また、「2年次、3年次どちらともいえない」としたものは、

「3年次の方が目標達成度は高まると思うが、他領域の実習と組み合わせられているので心身共に疲労する」が主な理由であった。

(2) 実習目標の達成可能性と達成期間の妥当性

実習目標の達成可能性についてみると、「達成可能」としたものが16名(17%)「やや達成可能」が24名(26%)で、両者合わせると40名(43%)であった。「どちらともいえない」は39名(42%)で、「高度すぎる」及び「やや高度すぎる」は、それぞれ7名(8%)であった(図3)。「達成可能」及び「やや達成可能」の理由としては、「患者・家族の状態に左右されながらも努力すれば達成可能である」や「努力目標として達成可能である」が主なものであった。「どちらともいえない」の主な理由は、「患者・家族の状況から目標達成が困難なものもあるため」、「自分自身の心理的な混乱と未熟から冷静に目標を達成する姿勢になるまでに時間がかかったため」であった。「高度すぎる」及び「やや高度すぎる」の理由は、「自分の死に対する考えをまとめるのに精一杯で患者に対して個別的なケアを行う所までいかなかったため」と「家族までは援助できなかったため」であった。

実習目標の達成期間として2週間(8回)の受け持ち期間が適切であったかどうかについての回答を図4に示した。「適切」及び「やや適切」は33%でその理由は、「患者・家族を把握し、ケアを行うにはこれ位の期間がよい」であった。「どちらともいえない」としたものは33%で、「期間がもう少し長ければ、患者との関係

も深まり目標の達成度も高まると思う反面、長すぎても心身に負担が大きい」といった相反する気持ちを理由として挙げている。「不適切」及び「やや不適切」と回答した学生は34%で、その理由は短かすぎる長すぎるの2つに分かれ、それぞれの内容を合わせると「どちらともいえない」の理由に類似していた。

(3) 文献学習の適切性

患者を受け持つ前に文献学習が1週間あったことについては図5の如く、「適切」及び「やや適切」としたものは75%で、その理由は、「死について考え、死生観をみつめる機会を得た」や「精神的な準備期間とすることができた」等であった。一方、「やや不適切」は7%で、その理由は、「死について考える機会となったが、一方では実習の不安・緊張へつながった」であった。

(4) カンファレンスの有用性

カンファレンスの有用性については、図6の如く、「意味がある」及び「やや意味がある」は74%で、大グループのカンファレンスについて「多くの学生と意見交換を行え、患者やケアに対する視野が広がった」、「自分の看護を違った角度からみつめなおすことができた」と答えていた。また小グループのカンファレンスについて「お互いの問題を共有して深い話し合いができた」と答えていた。両カンファレンスについて「どちらともいえない」としたものは23%で、大グループのカンファレンスについて「各自の問題を深めることができず、表面的な話し合いに終わった」と答えていた。

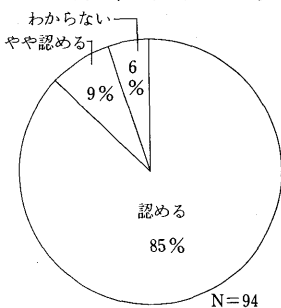


図1 実習の必要性・意義

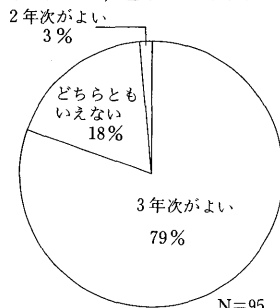


図2 実習実施時期の妥当性

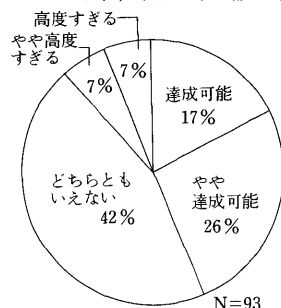


図3 実習目標の達成可能性

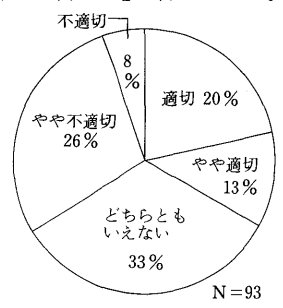


図4 実習目標達成期間の妥当性

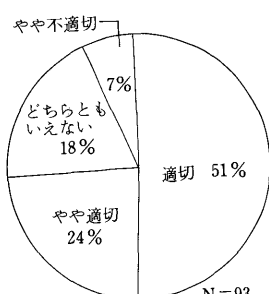


図5 文献学習の適切性

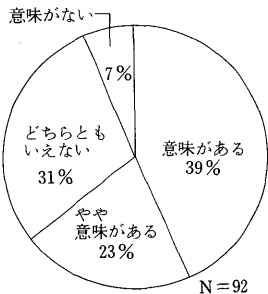


図6 カンファレンス(大グループ)の有用性

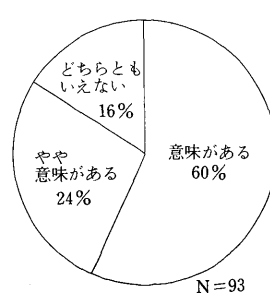


図7 カンファレンス(小グループ)の有用性

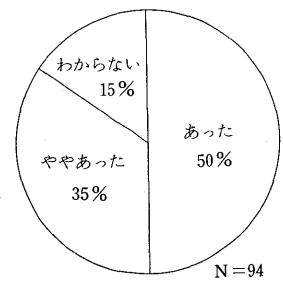


図8 実習における自己発見・自己成長

小グループのカンファレンスについて「少数（1～2名）すぎて面接のようであった」と答えていた。

(5) 実習の「落ち込み」, 「支え, 励み」について

実習中の「落ち込み」につながったことを、表1に示した。回答総数はのべ71であり、ケアの未熟さに関すること(21)、患者に関すること(20)が58%を占めていた。そして、ケアの未熟さについては、看護技術やコミュニケーションの未熟さから苦痛の緩和や信頼関係が得られなかったこと等が挙げられた。その他余裕のなさから自己中心的になっている自分を感じたこと、体調が悪かったこと、患者の状態の悪化や死、拒否的な言動等が挙げられた。

一方、表2に示すように、「支え, 励み」に関する学生の回答総数はのべ100であり、教師からの、支持・励まし、助言、指導、微笑や余裕のある肯定的態度(46)が最も多く挙げられた。その他友人・身内による励まし、協力、患者の闘病意欲や生き様、苦しみの中にかい間みた笑顔、病棟ナースによる支持・励まし等が挙げられた。

表1 実習における「落ち込み」

回答内容	N(%)
〈ケアの未熟さに関して〉	21(30)
・看護の未熟さから、ケアを失敗したり、患者の苦痛を緩和できなかったこと	
・コミュニケーションの未熟さから、患者との信頼関係が得られなかったこと	
・心理的サポートを十分に行えなかったことから、患者の不安、苦悩をどうしてあげることもできなかったこと	
〈患者に関して〉	20(28)
・状態の悪化や死	
・拒否的な言動	
〈自分自身に関して〉	14(20)
・余裕がなく自己中心的になっている自分を感じたこと	
・体調が悪かったこと	
〈医師、ナースに関して〉	6(8)
・治療やケアの方針に納得がいかなかったこと	
・患者に対する関心のなさ、配慮のなさ	
〈その他〉	10(14)
・記録が書けず、日々たまったこと	
・受持ち患者が途中で変更になったこと	
・教師から誤りを指摘されたこと	
・その他	

(6) 実習における自己発見・自己成長の程度

当概実習を通して、どのような自己発見・自己成長があったかに関しては、「自分の内面をみつめることの大切さに気づき、自分の心の動きをみつめることができた」、「自分自身の危機状態に対して新しい対処方法をみつけ出すことができた」、「自分中心の看護でなく、患者のことを第一に考えて看護することができた」等が挙げられた。

V. 考察

以上の結果から、実習の意義、目的・目標、方法などについて考察し、臨死患者の看護実習および実習指導のあり方を検討する。

(1) 実習の必要性・意義について

当概実習に関して、大多数(94%)の学生がその必要性・意義を認めたことは、理由としてあげられた内

表2 実習における「支え, 励み」

回答内容	N(%)
〈教師からの〉	46(46)
支持・励まし	
助言・指導	
肯定的態度(微笑, 余裕のある態度)	
〈友人・身内からの〉	29(29)
支持・励まし	
協力	
やさしい心遣い	
〈患者からの〉	16(16)
闘病意欲や生き様	
信頼を得たこと	
苦しみの中にかい間みた微笑	
〈ナースからの〉	5(5)
支持・励まし, 助言	
共にケアを考え、行えたこと	
〈自分自身の〉	4(4)
自分のケアが患者に役立ったことの喜び	
この機会を自分の学びにしたいという意欲	
過去の体験(身内の死)	

容からみても臨死患者の看護に関する教育方針や方法が学生によって、受け入れられたことを示しているといえるだろう。必要性・意義を認めたものの内わけをみると、58年度3年生は89%、59年度3年生は99%と10%の差が認められた。このことは、58年度、59年度3年生共、臨死患者の看護に関する講義、実習の位置づけは同じであったが、59年度は、成人看護学のカリキュラムの改正にむけて、より系統的に明確に臨死患者の看護をとりあげたためその考え方や理念、講義や実習の指導方針が学生に明白となったこと、また、学生の興味や関心がより高められたことが影響していると考えられる。

(2) 実習時期、実習目標および目標達成期間について

実習時期に関して、2年次より3年次が適当であるとしたものが圧倒的に多かったのは、①精神、母性、小児看護学領域の講義を終え実習を経験したことで、死や臨死患者の看護を多面的かつ包括的に捉えることができるようになったこと②患者・家族との関わりの中で自己をみつめる機会を得たことで自己成長があったこと③一年間の各領域での学習の積み重ねによって知識、技術の向上があったこと④2回目の成人病棟での実習からゆとりをもってケアを行えたことなどにより、学習意欲が高められたためと考えられる。

一方、少数ではあるが2年次、3年次のどちらともいえないとしたものがみられたのは、実習グループによっては他領域の実習前に当概実習が始ったこと、他領域の実習終了から当概実習までの期間が短かく、実習に対する準備学習に十分取り組めなかったことや、前の実習で解決できなかった問題を抱えたままの状態でも概実習に臨み、気持ちが混乱し精神的準備がなされていないことなどが影響していると考えられる。

実習目標の達成可能性について、達成可能である、どちらともいえないとしたものがほぼ半数の割合であったことは、実習目標の水準としては達成可能性は高いが、実習目標の内容によってはその達成が受け持ち患者の状態や家族の付き添い(面会)の状況に左右されることを示しているといえるだろう。患者選択に際して、目標達成に適切な患者が常時病棟にいるとは限らず、実習生の3分の2ぐらいであるという現実、また、患者が急変しやすいことからこのような結果は妥当と考えてよいであろう。一方、実習目標が高度すぎる、やや高度すぎるとした学生が14%いたが、実習目標達成評価の観点からみると、全員が70点以上、しかも70点台の学生が42%(残りは80点以上)いたということは、目標達成度に関して、学生と教師との間にズレがあるものと考えられる。しかし、目標達成度が

高かったということは、指導者の患者の選択や目標達成をめざした指導・援助によるものと考えられるが、一方、この背景には学生の並々ならぬ努力があったことが考えられ、この努力、辛さが目標を高度すぎると言わせたと考えられる。

実習目標達成期間(2週間)の適切性に関して、学生の意見は、適切、どちらともいえない、不適切がそれぞれ3分の1の割合であった。しかし、どちらともいえないと答えた理由をみると、学生が、実習目標達成に対する内的要求の高まりと、心身の過度の負担との間で葛藤していることが伺えるので、実習目標の達成の程度や学生の負担を考え合わせて学習意欲を持続するためには、現行の2週間がほぼ妥当であると考えてよいであろう。

(3) 文献学習について

臨死患者を受け持つ前に文献学習を行ったことに對し、多くの学生がその有用性を認めた。このことは、Tornyay²⁾が、学習の予備的な構えをもつことは、学習の動機づけになると同時に、学習の意義を深める効果があると述べているように、文献学習により、学生は、様々な臨死患者の状態を知り、死の看護に対する理論的な考え方や枠組をもつことで興味や意義を深め、実習への意欲を高めたことを示すものと考えられる。

また、Doreen³⁾は、死の問題に立ちむかう場合、死に関する文献は自分自身の死に対する反応を認めさせ、それを外に出すことを勇気づけると述べている。本調査の結果からも、多くの学生が文献学習を行ったことが実習に対する精神的準備となったことをあげており、このことは、文献学習を行うことで学生は、実習に対して予期的心配をし、臨死患者に対して自分でも何かができるという自信をもったことを示していると考えられる。しかし、一方で少数ではあるが、文献学習を行ったことがかえって実習に対する緊張を増したとの意見があった。これは、学習への構えが緊張、不安・恐怖などを伴って作られるなら、それは同時に心理的な混乱を伴いかねない²⁾と言われているように、学生によっては、文献学習が十分に行われていなかったために、理解が不十分で死の問題に対する知識化が中途半端となりかえって実習への緊張、不安が高まったことを表わしていると考えられる。

(4) カンファレンスについて

カンファレンスについては、大多数の学生がその有用性を認めており、それらの理由をみると、2つの大きさの異なるカンファレンスは、目的が異なること、それぞれの利点と欠点を補い合っていることを学生が理解していたことを示していると考えられる。

2つの大きさの異なるカンファレンスを行うことは、学生に情報、知識を広く深く獲得させることができ、学生の学習効果を高め、学習意欲の高揚につながると考えられる。また、臨死患者の看護という非常にストレスの強い実習を行っている学生にとって、広く深く支持・支援を得ることができ、ストレス解消につながるものと思われる。

大グループのカンファレンスについては、少数ではあるが、6名の学生がその有用性を認めていなかった。このことは、大グループのカンファレンスは、グループメンバーが11~14名と多く、限られた時間の中での討議に積極的に参加できず、他の学生との意見交換が行えなかった学生がいたことを示すものであろう。小集団討議で多彩な意見交換を目的とする場合、そのメンバーは10~12名がよい⁴⁾と言われているが、複雑な問題について討議するには、グループダイナミクスから考えて7~8名が適切と思われ、11~14名のグループでは、少数のものが討議に参加できなくてもやむを得ないことと考えられる。しかし、大小異なるカンファレンスの目的と利点を強調することによって、また、運営の仕方を工夫することによってカンファレンスの意義を高め、学生の学習意欲を上げることは大切であろう。

(5) 実習中の「落ち込み」、「支え、励み」について

実習中の落ち込みに関しては、多くの学生がケアの未熟さをあげていた。このことは、重篤で苦痛の激しい精神的にも不安定な患者の看護において、学生の緊張、焦りはケアの未熟さを増強し、学生は患者の苦痛を緩和することが困難となり、また、精神的安楽が与えられず、無力感を味わされたものと考えられる。

一方、実習中の学生の支え、励みについては、教師によるものが最も多くあげられていた。このことは、臨死患者のケアという非常にストレスの強い状況において、学生は、自己の一貫性を脅やかされるような体験をしばしばする⁵⁾と言われており、そのような学生が、教師の細やかな指導のもとで、励ましや保証を与えられることによって、自己の安定性を維持し、自分のできるケアを明確にして実習に対する意欲を高めたことを示すものと考えられる。

(6) 自己発見・自己成長について

実習を通しての自己発見・自己成長として、自分の

内面をみつめることの大切さに気づいたことは、当概実習の情意領域の目標として自己洞察をあげ、日々の記録として臨死患者との関わりを通して感じたことを理由とともに書かせたこと、また、指導教師が学生の気持ちを尊重し、支持、保証したり、自分の気持ちに気づかせるように働きかけたことなどが影響していると考えられる。

おわりに

看護基礎教育において、臨死患者の看護についての必要性・意義はますます強調されるようになった。成人看護学では、臨死患者の看護教育の位置づけ、実施方法など教科カリキュラムの改正にむけて、臨死患者の看護実習の目標、実施方法などを修正し、試行して評価を2年間行った。

これらの結果と教師達の評価をもとに、臨死患者の看護の理論と実習の位置づけを明確に決定し、また、実習目標の内容・程度、指導方法、実施時期・期間、グループ編成などを確認・修正した。

臨死患者の看護の理念に基づく理論と実践の統合と、ストレスの強い状況での学習の効果をいかに推進するかが今後の課題である。

文 献

- 1) 小島操子, 岩井郁子: 「死・死の看護」教育の現状と課題, 看護, 37(7): 4-15, 1985.
- 2) Rheba de Tornay, 中西陸子訳: 看護教授法, 40-47, 医学書院, 1973.
- 3) Doreen J. Wise: Learning about Dying, Nursing Outlook, 22: 42-44, 1974.
- 4) ロンドン大学・大学教授法研究部, 喜多村和之, 馬越徹, 東曜子編訳: 大学教授法入門, 玉川大学出版部 106-133, 1982.
- 5) 小松浩子, 小島操子, 岩井郁子, 田村正枝, 伊奈侑子, 菊地登喜子, 大森里子: 臨死患者とその家族を援助する看護学生に対する実習指導に関する研究(その1)実習中の学生の心理的变化の過程, 第15回日本看護学会集録, 看護教育(広島), 251-254, 1984.

(昭和60年12月20日受付)

NURSING EDUCATION OF TERMINAL CARE IN ADULT NURSING

Misako Kojima et. al.

According to the development of modern medicine and cultural background, the death education in nursing has also been emphasized.

In the field of adult nursing in our college, we have evaluated the nursing education of terminal care through clinical experiences geared to revision of the adult nursing curriculum.

For the purpose of evaluation concerning about learning experiences in terminal care, the questionnaires were developed and delivered to 106 junior students in 1983 and 1984. Responses were gained from 95 (90%) of them. The results were as follows;

- 1) 88 students (94%) expressed that this learning experience was significant.
- 2) Many students expressed the learning by literatures were useful for this experience.
- 3) Many students discussed the effects of two different size of conferences.
- 4) Many of students were suitably supported by their teacher.
- 5) Most of students recognized their self-growth through this experience.
- 6) Student's responses provided suggestions for the nursing education of terminal care in adult nursing.

紀 要 第 11 号 訂 正 表

	〔誤〕	〔正〕
4頁	右上から23行目 賢明	賢明
5頁	右上から12行目 〃	〃
5頁	右下から22行目 〃	〃
5頁	右下から13行目 入っ <u>ま</u>	入っ <u>た</u>
10頁	左上から23行目 賢明	賢明
10頁	右上から20行目 訂 <u>画</u>	計 <u>画</u>
11頁	左下から1行目 賢明	賢明
11頁	左下から2行目 〃	〃
18頁	表7裏面の如く訂正	
22頁	上から11行目 <u>less</u>	<u>more</u>
30頁	題名下 小島操子, 岩井郁子, 田村正枝, 小松浩子, 荒川靖子, 大森里子, 伊奈侑子, 菊地登喜子	小島操子 岩井郁子 田村正枝 小松浩子 荒川靖子 大森里子 伊奈侑子* 菊地登喜子* * 前聖路加看護大学
32頁	右上から9行目 1週間あったこと <u>につ</u> いは	1週間あったこと <u>につ</u> いては
36頁	下から3行目 2) teacher.	teachers.
36頁	下から2行目 5) self-growth	self-growths
38頁	左表1 第三因子31 <u>アイイア</u>	<u>アイデア</u>
	〃 第五因子39 <u>質と厳しい</u> チェック	質を厳しくチェック
39頁	左 第七因子22 <u>処置</u> 望ましい	処 <u>遇</u> 望ましい
	〃 第七因子23 <u>仕中</u> に	仕 <u>事</u> に
	〃 第十因子18 <u>時間</u> 処理	時間 <u>内</u> 処理
40頁	左表II 4 <u>仕事量</u> の安定	仕事量 <u>が</u> 安定
	5 <u>仕事内容</u> の変化	仕事内容 <u>が</u> 変化
	22 <u>業績</u> 能力に	業 <u>績</u> 能力に
	〃 <u>応じた</u> 処理	応じた <u>処</u> 遇
44頁	左上から5行目 <u>バラツ</u> き	バラ <u>ツ</u> き